

現代のさよならのカタチ

№.26

2013年11月、高崎市吉井町の仁叟寺で、地元住民ら約90人が集まった防災訓練が開かれた。この年の5月、同寺は県内の寺院として初めて、災害時の避難所に指定された。東日本大震災を教訓に、寺と地域が連携して市に働きかけたことが実を結んだ。県曹洞宗青年会長で副住職の渡辺龍道さん(39)はこの指定について、「寺が地域のためにその価値を生かす取り組みだった」と説明する。

福島で目の当たり

東日本大震災の発生から5カ月後の11年8月、渡辺さんは、慰霊や炊き出しのボランティアに取り組みするため、親友

が副住職を務める福賀町南相馬市の新祥寺を訪れた。そこ

災害時心のよりどころ

で目にしたのは、未曽有の災害が発生した後、地域から助けを求められ、住民の心のよりどころとなる寺の姿だった。

大震災により、新祥寺では約200軒の檀家が津波で流され、約80人の檀信徒が命を奪われた。行政の依頼で、寺には安置する場所がない犠牲者の遺骨約400体分が置か

れていた。同寺に対し、葬儀や法要を通じた救いを期待する住民が多かった。行政主導の合同の葬儀が営まれていたが、多くの被災者は個別の葬儀を望んだ。そんな檀信徒の求めに、寺は「尊に応じた。お布

つを置く。だが、渡辺さんは被災地で目の当たりにした光景こそ「本来あるべき寺」地域との関係」と受け止めた。

開かれた寺

仁叟寺はそれまでも、子ども向けの座禅会や婚活イベントも開くなど、地域に「開か

れた寺」を目指して取り組んできた。被災地での体験はさらに、寺と社会の絆について考える貴重な契機となった。渡辺さんは父の渡辺啓司住職や住民と連携し、寺を災害の避難所として活用するために動きたした。

メモ

曹洞宗が3割で最多

県内の寺院の宗派別割合。曹洞宗が約1200ある。宗派別でみると最も多いのは曹洞宗の寺院で、全体の約3割を占めている。2番目に多いのが天台宗で全体の2割強、真言宗豊山派、高野山真言宗、浄土宗と続く。

集団生活に適した環境が整っていると確信していた。戦時中、仁叟寺は東京から学童の集団疎開を受け入れた実績を

持つ。ただ、被災地では近くの寺に避難した人がいたが、行政に避難所として指定されていない寺には救護物資が届かないなどの問題があった。震災から2年あまりが経過して、仁叟寺は避難所に指定された。前後して檀家の関係者から大型の非常用発電機や携帯トイレなどの寄贈が相次ぎ、避難所としての機能が充実・強化された。寺の価値を生かし、寺だからこその社会との絆を築きた。住民と共に取り組んだ避難所指定を通して、渡辺さんはそんな思いを強くしている。



「寺と社会の良い接点をつくっていきたい」と話す渡辺さん

連載へのご意見やご感想、墓や葬儀など「甲い」全般に関する情報をお寄せください。〒371-8666 上毛新聞社編集局「さよならのカタチ」取材班。ファックスは027-251-4334、メールはsayonara@raijin.com

第3章 揺らぐ絆⑥

災害時心のよりどころ

2013年11月、高崎市吉井町の仁叟寺で、地元住民ら約90人が集まった防災訓練が開かれた。この年の5月、寺は県内の寺院として初めて、災害時の避難所に指定された。東日本大震災を教訓に寺と地域が連携して市に働き掛けたことが実を結んだ。県曹洞宗青年会長で副住職の渡辺龍道さん(39)はこの指定について「寺が地域のためにその価値を生かす取り組みだった」と説明する。

福島で目の当たり

東日本大震災の発生から5カ月後の11年8月。渡辺さんは、慰霊や炊き出しのボランティアに取り組むため、親友が副住職を務める福島県南相馬市の新祥寺を訪れた。そこで目にしたのは、未曾有の災害が発生した後、地域から助けを求められ、住民の心のよりどころとなる寺の姿だった。

大震災により、新祥寺では約200軒の檀家が津波で流され、約80人の檀信徒が命を奪われた。行政の依頼で、寺には安置する場所がない犠牲者の遺骨約400体分が置かれていた。

同寺に対し、葬儀や法要を通じた救いを期待する住民がたくさんいた。行政主導の合同の葬儀が営まれていたが、多くの被災者は個別の葬儀望んだ。そんな檀信徒の求めに、寺は丁寧に応じた。お布施のやり取りも、寺と檀信徒の双方が被害を受けたことを踏まえ、互いを思いやりながら行われていた。

渡辺さんは「被災地で寺は人々から頼りにされていた。そこには寺と地域との確かな絆があった」と振り返る。最近は葬儀や法事でしか関わらなくなり、住民と寺との接点が減っていて、「寺離れ」が指摘される。だが、渡辺さんは被災地で目の当たりにした光景こそ「本来あるべき寺と地域との関係」と受け止めた。

開かれた寺

仁叟寺はそれまでも、子ども向けの座禅会や寺での婚活イベントを開くなど、地域に「開かれた寺」を目指して取り組んできた。被災地での体験はさらに、寺と社会との絆について考える貴重な契機となった。渡辺さんは父の渡辺啓司住職や住民らと連携し、寺を災害の避難所として活用するために動き出した。

寺には多くの人を受け入れる空間や大きな畳敷きの部屋があり、学校や公民館以上に、

集団生活を受け入れるのに適した環境があることを確信していた。戦時中、仁叟寺は東京から学童の集団疎開を受け入れた実績を持つ。ただ、被災地では近くの寺に避難した人がいたが、行政に避難所として指定されていない寺には救援物資が届かないなどの問題があった。

震災から2年あまりが経過して、仁叟寺は避難所に指定された。前後して檀家の関係者から大型の非常用発電機や携帯トイレなどの寄贈が相次ぎ、避難所としての機能が充実・教化された。寺の価値を生かし、寺だからこそできる社会との絆を築きたい。避難所指定を通して、渡边さんはそんな思いを強くしている。